

世界に ひとつの ゴルフの話

ゴルフの教
だけ物語が
ある。

文・平山讓
挿絵・唐仁原教久

ひらやまゆずる
主な作品に阪神淡路大震災と古
市忠夫プロを題材にした『あり
がとう』（講談社）、『ありが
とうのゴルフ』（小社刊）。近著に
ゴルフ短編集『リカバリーショ
ット』（幻冬舎）、スポーツで片
麻痺から立ち直った男たちのド
ラマ『片翼のチャンピオン』（講
談社）などがある。
www.y-hirayama.com

教え子に、なにかを教わることも
ある。

平田竹男さんは、さほどゴルフに
興味がなかった。実家の庭の芝生で
は、よく父がアプローチの練習をし
ている姿を目にした。幼い頃にはア
イアンで遊んだ思い出もあるが、大
人になってからは、ゴルフに関心が
なくなっていた。

早稲田大学大学院のスポーツ科学
研究科教授に就任すると、ゴルフ関
係者が続々と入学してきて、プロゴ
ルファーやプロコーチも教え子にな

った。彼らへの研究指導や論文への
助言にはゴルフの知識も不可欠で、
ゴルフについて勉強をした。
47歳のとき、ふと、自分もゴル
フをしてみようと思いたち、武蔵C
Cの会員になった。

「先生、入会するゴルフ場を間違え
ましたね」

そう教え子たちにいわれた。

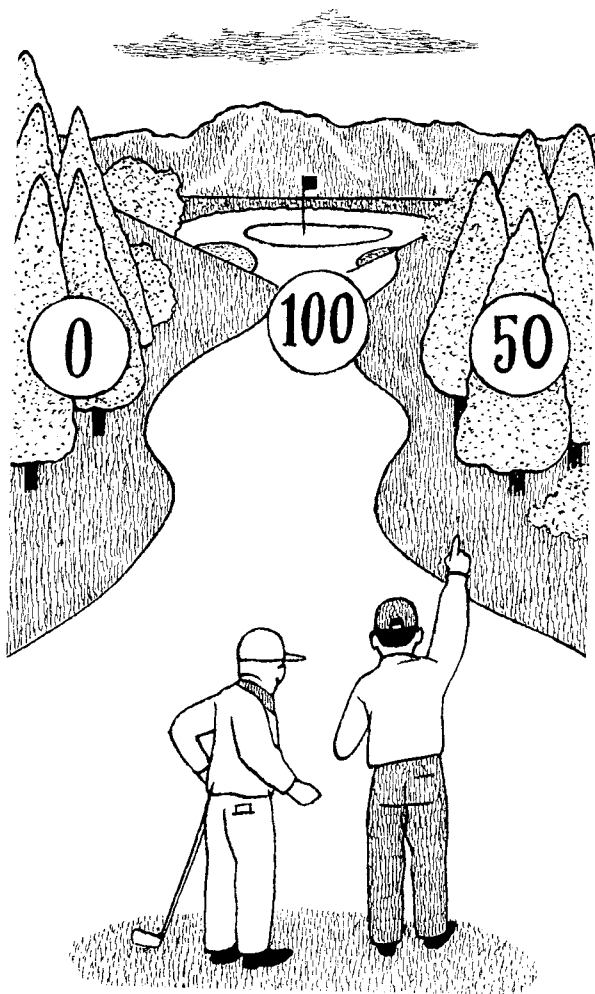
武蔵CCは、本格的にゴルフをし
たことがない平田さんには過酷なチ
ャンピオンコースで、周囲は感嘆す
る腕前の会員ばかりだった。

それでも臆することなく、平田さ
んは一人でコースへ行き、会員たち
と一緒にラウンドした。三人がフェ
アウェイで待っているのに、一人で
林のなかで四苦八苦することもあつ
た。迷惑をかけまいとの思いが緊張
につながり、ミスショットをしてし
まうこともあった。

そんなとき、教え子の一人である
プロゴルファーが助言してくれた。

「先生、相手も時間も、なにも気に
せずに打っていいんですよ」
もう一人の教え子のプロゴルファ

教え子に指導を受ける 教授の愉快的なゴルフ



「も助言してくれた。

「先生、左の林なら0点、右の林なら50点、フェアウェイなら100点、そんな気持ちでいいんですよ」

平田さんは、気が楽になった。スライスが多かったが、右の林でも50点といわれ、重圧がなくなった。

平田さんは腰痛持ちで、当初は1ラウンドするのもやっとだった。日が長い夏に、年配の会員に誘われ、1ラウンドハーフを無理してまわつ

たときには、マッサージへ直行しなければならなかった。

それが、またも教え子のプロコーチの一言に救われた。

「先生、先生のスウィングは腰に悪いスウィングではないから、思いきりゴルフを楽しんで大丈夫ですよ」

プロコーチからそういわれると、安全感につつまれた。暗示にかけられたかのように、不思議と腰痛が気にならなくなり、やがては1日2ラ

ウンドしてもマッサージへ行かなくてもいいようになった。

ホームコースで日本オープンが開催されたとき、記念にとプロアマに出場した。クラブの月例に参加し、競技ゴルフも楽しめるようになった。練習も好きになり、アプローチ練習場で2時間過ごすこともある。

さほど興味がなかったゴルフだが、いまでは「先生」は教え子たちとも、愉快地プレーを楽しんでいる。